

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19592525

研究課題名（和文） 感染性胃腸炎における外来ケアモデルに関する研究

研究課題名（英文） Research on outpatient department nursing on the Infectious Gastroenteritis.

研究代表者

宮城 由美子（MIYAGI YUMIKO）

福岡県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：20353170

研究成果の概要（和文）：

幼児をもつ保護者を対象に下痢症による外来受診時の療養指導内容及び家庭での療養の自己評価等を調査した。結果自己評価は、保護者あるいは療養項目で有意な違いがみられ、保護者は症状への対応以上に生活自体に困難を感じ具体的指導を求めている。また看護師の指導内容は、症状、生活、治療、再受診の目安等であった。看護師が行う指導と家庭での実践との間には乖離がみられることも明らかになった。これらの結果を用いて下痢症時の家庭療養ケアモデルを試作し、実用化に向けたトライアルを実施した。

研究成果の概要（英文）：

Diarrhea is the common disease for small children and caregivers. What kind of care will children provide for the caregivers at the time of diarrhea in each home. What kind of guidance would the caregivers receive at the pediatrics. Were the caregivers able to completely practice it in each home. We investigated the self-assessment of the caregivers about these questions. On the other hand, we interviewed contents of the care to some pediatric nurses. We found some gaps between the guidance of medical professional and the practice by caregivers. The caregivers recognized need of the care, but some items were not able to do practice. The nurse with the carrier in pediatric office recognized the presence of the problem caregivers. We referred to these results, and produced a care model for trial.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：小児・下痢・外来看護・家庭療養・ケアモデル

## 1. 研究開始当初の背景

感染性胃腸炎は、乳幼児にとって呼吸器感染症について罹患数が多い疾患である。なかでもロタウイルス下痢症は、わが国において5歳までにすべての子どもがウイルス感染すると言われ、2人に1人が小学校入学までに外来を受診し、10人に1人が入院に至っている。毎年5歳未満の子どものうち78,000人が入院に至っていることが明らかになっている。死に至るケースが少ないために軽視されており、先行研究でも疫学的研究はあるも、感染性胃腸炎に関する看護はほとんど行われていない。しかし、入院による直接医療費は年間約100億円になると言われている。入院に至る症状として、脱水・電解質異常・痙攣などがあるが、早期からの通院治療及び家庭療養にて改善できる疾患でもあることも考えられる。そのため入院への移行症例の共通性を明らかにし、受診タイミングや家庭療養の方法を調査することで、感染性胃腸炎のケアモデルの開発を行い、外来における受診者に対する教育的支援や集団保育を行っている保護者への啓発活動を行うことは重要と考える。

## 2. 研究の目的

小児の感染性胃腸炎は、小児科外来においても高い受療率を占める流行性の疾患である。なかでもウイルス性感染性胃腸炎であるロタウイルスは、嘔吐、下痢を主症状とし、その結果脱水を来すことで、家庭療養が困難となり入院へ移行することが多い。我が国においても年間80万人の6歳以下の小児がロタウイルス下痢症にて病院を受診しており、保育園に通う子どもが3歳になるまでに30人に1人が入院という結果が得られている。ロタウイルスは人から人へ、手やものを介して伝播していく。入院となるような重症化の症状として、脱水、電解質異常や痙攣などがみられる。保育園児において、入院へ移行した背景のひとつに、集団生活や完全回復に至らずに登園したり、外来において適切な指導を受けていないため家庭療養行動が行えないことなどが考えられる。

そこでロタウイルス下痢症を含む、ウイルス性感染性胃腸炎で小児科外来受診及び入院経験をもつ保育園児、幼稚園児(自宅保育児含む)を対象に、外来受診時での療養指導内容、及び家庭での療養行動、回復後の登園時の状態などを調査し、家庭療養行動の方法を明らかにし、小児科外来看護師における感染性下痢症時における指導プログラム及び

家庭療養マニュアルを作成し指導の確立を図る。さらに集団保育現場における感染対策マニュアルの作成を行い、外来看護師による地域支援の方法を明らかにしていく。

### (1)平成19年度

保育園児及び幼稚園児(家庭保育児)のウイルス性感染性胃腸炎にて医療機関受診及び入院経験を有する者に対して、初発時からの経過、受診タイミング、医療機関外来における療養指導内容、家庭における療養行動、休園期間などの調査を行う。また医療機関の医師や看護師、医療機関スタッフ、家族、友人、メディアから療養を行う上でのアドバイスの有無を調査し、療養行動との関係を明らかにする。

### (2)平成20年度

小児科診療所、小児科クリニックに勤務する看護師を対象に、感染性胃腸炎時(嘔吐・下痢時)に家族に対する看護支援内容について調査を行う。さらに今回の調査で看護師が行う外来受診時の保護者に実施した指導内容と、平成19年度に調査した保護者が受けた指導内容との共通性、差異を明らかにし、外来小児科における感染性胃腸炎における外来ケアモデルの開発を行う。

### (3)平成21年度

外来で対応可能なケースの場合、未熟な保護者を支援するためのキーパーソンは、外来看護師である。これらの専門職が家族に対して十分な知識の提供や関わりを行うことで、感染症の蔓延、過剰医療、手遅れなどを防ぐことが可能となる。そこで小児科外来における感染性胃腸炎時における家庭療養ケアモデルの開発を行い、そのケアモデルを外来看護師が有効に実践できるための教育的支援を行い、さらにケアモデルをもとに家庭療養マニュアルの作成を行い、地域における保護者の支援方法を明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

### (1)平成19年度

保育園児及び幼稚園児(家庭保育児)に対して、感染性胃腸炎にて医療機関受診及び入院経験を有する者に対して、初発時からの経過、受診タイミング、医療機関外来における療養指導内容、家庭における療養行動、休園期間などの調査を行い、入院への移行要因を明らかにすることを目的に調査を行った。調査内容は、下痢症状の経験の有無、下痢症状時における医療機関受診時期、初診時に受けた療養指導内容、医療機関で誰から療養指導を受けたか、家庭における医療機

関で受けた療養指導内容の実施状況、下痢症状がみられた時の登園状況、自宅での療養生活で困ったこと(自由記載)について調査した。

#### (2)平成 20 年度

診療所である小児科医院、小児科クリニックに勤務する看護師 20 名を対象に、感染性胃腸炎時(嘔吐・下痢時)に家族に対する家庭療養に関する指導支援内容についてインタビューを実施した。インタビューは、看護師の意識がより明確になる感染性胃腸炎の流行期である時期(2~3月)に実施した。質問内容として【看護師の個人背景内容】、【専門的知識、技術に関すること】家庭における水分補給補給法、食事の内容・方法及び進め方、スキンケアについて、脱水症状の観察方法、家族の感染予防対策、登園について、【看護師の小児看護に対する意欲に関する内容】について調査を行った。

#### (3)平成 21 年度

平成 19 年度及び 20 年度に実施した調査をもとに、感染性胃腸炎における嘔吐・下痢時における家庭療養ケアモデルを開発した。モデル開発においては、研究代表者及び共同研究者、及び専門知識の提供者として小児科外来看護師と共に、家庭において無理なく実施可能な療養か否かを確認しながら開発していった。開発された家庭療養ケアモデルをもとに外来看護師を対象にした、子どもの健康支援としてのワークショップを開催した。外来看護師への教育的支援としてのワークショップは、平成 19 年度の調査において、最初に受診する医療機関の 83%が開業小児科医院及び子どもクリニックであったため、総合病院小児科外来ではなく、開業小児科医院や子どもクリニックの外来看護師を主たる対象者とした。ワークショップ実施後には、外来看護師へは外来におけるケアモデルが外来において有効か否かを調査した。併せて開発された家庭療養ケアモデルをもとに「家庭療養マニュアル」の作成にむけ、保育園・幼稚園における保護者会で、育児支援講座「病気の子どもの救急処置」を展開した。

## 4. 研究成果

### (1)平成 19 年度

下痢による外来受診の特徴について

保護者約 2,412 名に配布し 1,960 名から回答を得て、1,952 名分を分析の対象とした。調査対象児の平均月齢は 52.2 ヶ月(SD±19.0)であり、過去に下痢を主訴とする症状での外来受診経験を持つ児は約 7 割(1,376 名)であった。受診時期は、保育園児と幼稚園児ともに 12 - 23 ヶ月児(37.5%)で最も多かったが、幼稚園と保育園の間で受診時期に有意な違いがみられた(P<0.001)。診断名は「ロタウイルス胃腸炎」(737 名)、「風邪に

よる下痢」(336 名)などが多くみられた。最初に訪れた医療機関は約 70%が小児科診療所で、救急病院の外来は 6%程度であった。

下痢症児に対する保護者の家庭療養への情報源の有用性

家庭療養の自己評価が高かった項目は【休園】、【水分補給】、【家族の手洗い】であった。一方、【お尻洗い】、【脱水観察】、【入浴】、【消化のよい食事】には低い自己評価が見られた。次にそれぞれの家庭療養項目に対する情報源の有用性は「かかりつけ医」、「かかりつけ医の看護師」、「家族や親戚」はいずれの項目でも高い平均値であった。特に「かかりつけ医」はすべての項目で最も高い有用性を示した。一方、「雑誌・インターネット」、「友人」の有用性は他の情報源と比較して高い値はみられなかった。

家庭療養中の家族の思い

下痢症における保護者の思いに関する自由記述は、325 人から回答が得られ、そのうち下痢症を経験したことがない回答を除いた 293 人の回答から【食事・水分の取り方の不安】、【家族内感染の不安】、【症状への対処困難】、【洗濯物・汚物の処理の困難】、【薬使用による困難】、【家族の QOL の変化】、【発達への影響】の 7 つのカテゴリーに分類された。【食事・水分の取り方への不安】は「食事の作り方や水分・食の進め方がわからない」や「欲しがって困った」など 4 サブカテゴリーに、【家族内感染への不安】は 2 サブカテゴリーに、【洗濯物・汚物処理の困難】は、「部屋・布団内における汚物処理に困った」、「洗濯に対する困憊」の 2 サブカテゴリーに、【家族の QOL の変化】は「家事労働の増加」、「母親の就労困難」など 5 サブカテゴリーに分類し家庭療養にむけての不安困惑が多くみられた。

### (2)平成 20 年度

A 市内の診療所小児科医院及び小児科クリニックの院長宛に、調査について依頼し、調査可能な医療機関を選定した。選定した医療機関の看護師に対し、調査依頼書及び調査協力の意志確認書を送付し、調査協力の意志確認書にて協力の有無を確認したところ、20 名の小児科外来看護師の協力が得られたため、聞き取り調査を行った。研究手法として、質的帰納法記述研究手法としてのグランデッド・セオリー・アプローチを用いた。聞き取りした調査内容について、逐語記録からデータ処理を実施した。

インタビュー内容は、【看護師の個人背景内容】、【専門的知識、技術に関すること】、【看護師の小児看護に対する意欲に関する内容】についてインタビューは 30 分から 60 分で行った。

【看護師の個人背景】として、看護師としての経験年数は、15.9 年、病棟での看護師経

験は、3.75年、外来での経験は、9.3年であった。そのうち小児病棟での経験は、20人のうち6人が経験者であり、経験年数は4.3年あり、小児科外来での経験年数は8.8年であった。看護師は13人、准看護師が7人であり、子育て経験者は、14人であった。

収集したデータは論理的サンプリングを行った。【看護師の専門的知識、技術に関すること】としては、症状、生活、治療、再受診の目安に関することであった。具体的には看護師が行う外来受診時の保護者に実施している専門的指導内容は、「水分摂取の方法」「食事の進め方」が多くみられた。しかし、看護師から有意に指導するのではなく、医師の説明後の補足あるいは復習的に説明していることが多かった。また、どの看護師も一律的な指導ではなく、個々に合わせた指導を行っていた。「水分摂取」においては、ほとんどの看護師がORSに関する指導を行い、水分の取り方を時間をかけて説明したり、資料を用いて説明するなど、具体的に説明していた。「感染予防に関すること」として、下痢時の臀部浴の方法に関する指導については、現在症状がみられた場合に指導していた。しかし予防的に下痢を生じているから今後のための具体的な指導には至っていなかった。家族兄弟の手洗いについては、ほとんど指導されていなかった。「脱水症の観察方法」に関する指導は、脱水症として症状(尿量が減少、口渇、皮膚弾力性の低下、涙の減少、大泉門陥没など)に関する直接的指導はみられなかった。【看護師の小児看護に対する意欲に関する内容】は、短い時間における「観察力」、かかりつけ医として「経過を知る」こと、来院時に「兄弟への関心」をもち、声をかけたりしていた。特に家庭療養や子育てに関することで前回来院に比べると実施出来たことなどについては「母への賞賛」を行い、母親に自信を持たせる関わりがみられた。また個々の家庭によって生活スタイルが異なるため、日常生活に関連することは「母の生活に併せた指導」を行っていた。さらに気になる母親や何度も説明が必要な親など様々な保護者が存在するため、来院時の母親の表情、言動、子どもへの接し方などを観察し「母の反応に応じた説明」や「母を見極める」ことを行っていた。地域の医療機関として患児だけではなく、「家庭まるめでの看護」を心がけて、診療終了時には「もう一声かける」ことで、母親の思いを更に知る手立てを実施していた。

### (3)平成21年度

平成19年度の子どもの下痢症発症時に保護者によって実施された家庭療養の内容とその自己評価及び外来看護師による保護者への家庭療養指導の状況を調査した。結果、8項目の家庭療養項目間で実践に大きな差が

みられる項目、看護師(と医師)が行う指導と家庭での実践との間には乖離がみられる項目、必要性を理解しているが実践が困難な項目等が明らかになった。特に実践が困難項目である「おしり洗い」「脱水症の観察について」、さらに日常生活における「汚物の処理方法」に関する内容が明らかになった。また20年度の看護師の指導実践内容からも「おしり洗い」は既に症状が出た場合の指導であることから、看護上の課題として「おしり洗い」「脱水症の観察について」「汚物の処理方法」の3点を中心にケアモデルを試作した。この試作をもとに、外来看護師にてフォーカスグループを作り検討した。グループ活動を行う中で、活発な意見交換があり各診療所での外来業務の中で試作的に取り組み試作モデルに実践状況を加味していった。試作モデルをさらに実用化に向け、外来看護師のフォーカスグループによりアクションリサーチを行い改良していき、外来看護の質を高めていく必要がある。また試作外来看護モデルをもとに、下痢症時における母親の家庭療養行動の質を高めるために「病気の子どもの救急処置」として保育園保護者(48名)に対して講演を行った。講演の満足度は高く、今後の育児に役立てたいことや、今後も病気に関する講演を参加したいと、家族への働きかけを行うことで、家族における家庭療養行動の質の向上につながるため家庭療養マニュアルの洗練を行っていく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

宮城由美子、山本八千代、下痢症を有する子どもの家族による療養行動と看護に関する調査、第29回日本看護科学学会学術集会

〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

宮城 由美子 (MIYAGI YUMIKO)  
福岡県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号：20353170

### (2)研究分担者

山本 八千代 (YAMAMOTO YACHIYO)  
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授  
研究者番号：10295149

横尾 美智代 (YOKOO MICHIO)  
長崎大学・医歯薬学総合研究科・教務職員  
研究者番号：00336158  
(H21:連携研究者)

(3)連携研究者  
なし